

## 君とダイナマイト

舞台はアパートの一室。  
ベッド、TV、冷蔵庫、など。若いカップルが住んでいる空間。  
ただ異様なのが部屋の壁や家具、家電などのほとんどが黒い。  
その中でポスターやドア、一部の物だけは濃いピンク色になっている。  
ベッドでは女が寝ている。  
男と友人が入ってくるところから始まる。

将 「いや、マジ見た方がいいから。」

吉田 「へー」

将 「いや、ホント ガチで。俺、あれだかんね、今まで見た中で一番こう刺激  
されたってゆーかさ、マジ、ヤベーよ」

吉田 「へえー」

ドアの鍵をかける音。ノブを回す音。

吉田 「あれ？」

将 「何やってんの？」

ドアの鍵を開ける音。ノブを回す音。

吉田 「あ、開いてたわ」

将 「あー、あるある」

二人、中に入ってくる。

将 「お邪魔しまーす！」

吉田 「うるせー、マジうるせー」

将、靴を脱ぐのに手間取る。それを見ている吉田。

吉田 「しょうちゃん、その靴良いねー」

将 「これさーこの間買ったんだよ」

吉田 「へー、いくら位した？」

将 「35000円」

吉田 「高っ。俺ぜってー買えねーわ」

将 「いや、こないださあ、仕事終わり、ハイライト行ったら 2000 枚出てさあ」

吉田 「マジかよ、何打ったの？」

将 「ジャグったのさあ。ってかハイライト、ジャグしかないし」

吉田 「あー、そうなんだ。行ったことないから」

将 「あれだよ、マジね、クソってっから、あの店」

二人、部屋へ。

吉田 「設定入ってない感じ？」

将 「多分あれだよ、あって2だよ」

吉田 「マジか、良く勝てたね、ってか行ったね」

将 「いやさあ、マジあれじゃん？ジャグラー波あっからさ。ハマってレグってるの続いでるの狙えばさ、結構勝てっからね」

吉田 「あー」

将 「俺打った台もさ、500ハマり、400ハマりからのだからね。その後のジャグ連、ビッグだけだったし」

吉田 「スゲーなあ」

将 「もうさ、130越えてソッコー辞めたよね。んでさ、そのあと見に行ったらハマってやんの」

吉田 「へえー」

将 「明日も稼いでくるわ。あ、行く？明日」

吉田 「あー・・・、えーどうしよっかなあ。ハイライトでしょ？」

将 「いいよ、別に何処でも」

吉田 「明日って何日だっけ？確か10日だよね」

将 「だねー」

吉田 「だったらワコーじゃね？」

将 「ワコーか、俺行ったことない」

吉田 「いや、ワコー良いよ。イベントちゃんとやってるし、こないだも北斗の6ツモったし」

将 「おー、スゲーじゃん」

吉田 「まあ、負けたけど」

将 「ダメじゃん」

吉田 「いや、つってもちよっとだから。5000円とかそんぐらいだし」

将 「じゃあ、勝ったようなもんじゃん」

吉田 「いや、負けてっけどね」

将 「でも北斗で5000円負けは勝ったようなもんだよ」

吉田 「マジ悔しくてさー、マジ台パンしてやろうかと思ったよね。ハハハ」

吉田、タバコを吸う。

将 「ってかさ、良いの？」

吉田 「？」

将 「あーちゃん寝てっけど」

吉田 「ああ、大丈夫。大丈夫。あの、こいつ死んでっから」

将 「マジかー、死んじゃったかー」

吉田 「いやー死んだねー」

将、タバコを吸う。

吉田 「やっぱ失ってから気付くよね、ああ、俺なんでこいつにもっと中出ししてやらなかったのかって」

将 「(笑いながら) ゲスい、お前ゲスいわー」

吉田 「ハハハ。あ、何か飲む？ビールしかねーけど」

将 「ああ、もらう」

吉田、冷蔵庫にビールを取りに行く。

将 「あ、そーいやさ、知ってる？」

吉田 「何？」

将 「あの、ユキちゃんって居たじゃん？」

吉田 「ユキちゃん？」

将 「あれ？被ってないっけ？お前が辞める2ヶ月前ぐらいに入って来た若い子」

吉田 「あっ、あれだ、ザーさんと付き合ってた子」

将 「そうそうそう」

吉田 「うん、どうしたの？」

将 「なんかねー、死んだらしいよ」

吉田 「おー・・・おー？何でまた」

将 「いや、それは分かんないけど」

吉田 「へー」

間。

吉田 「あれだよねー」

将 「？」

吉田 「あの子、胸でかかったよねー」

将 「そこかよ」

吉田 「なんかスッゲーエロかったもん。正直ね・・・ヤリたかったね」

将 「あー、でもやっぱあれ、ヤリマンだったらしいよ」

吉田 「あ、そうなんだ」

将 「俺の元カノがさ、ユキちゃんのこと知っててさ、スゲーボロクソ言ってたわ」

吉田 「マジかー」

将 「多分あれでしょ、ザーさんは金目当てでしょ」

吉田 「まあ、そんな感じはしたよねー。ザーさん無駄に金持ってそうだし」

将 「それがさあ、ちよっ、聞いてー」

吉田 「なに何？」

将 「俺もさー、聞いて、マジバビったんだけどさ」

吉田 「うん」

将 「ザーさん、かなり借金あるらしいよ」

吉田 「マジで！？」

将 「ガチで」  
少し自慢気にタバコをふかす将。

吉田 「えっいくら？」  
将、吉田に耳打ちする。

吉田 「うわっ、マジで？」

将 「マジマジ。バビったっしょ」

吉田 「バビるわー、スッゲーバービーだわ」

将 「ヤベーベ？」

吉田 「えっ、それ誰から聞いたの？」

将 「主任がこないだ呑みに行った時に言ってた」

吉田 「うわーすっげー、うわー、バービーだわ」

将 「推すねーバービー、推すねー」

吉田 「ってことはさ、借金して買いでたの？」

将 「みたいよ」

吉田 「ソープで良くね？デリヘルで良くね？」

将 「いやー、でもそこはさ、ほら、やっぱ自分の物ってのが良いんじゃない？」

吉田 「なるほどねー、まあ、自分の物にできてねーけど。デリヘルと変わんねーけど」  
二人、笑う。

将 「でも正直さ、ユキちゃんだったらいくら払う？」

吉田 「あー、いくらだろ・・・一万？」

将 「安っ！さすがにそれは安過ぎんだろ」

吉田 「まあ、だよなあ、あの胸だしな」

将 「ちなみにカップはEカップです」

吉田 「おー、そいつはイーねー」

将 「親父か、お前親父か」

吉田 「そうだなー」

将 「あと、喘ぎ声でかいよ」

吉田 「あー、イーねー。そいつはイーねー」

将 「しつけーな」

吉田 「えっ、てかさ、もしかして しょうちゃん、やったの？」  
ニヤつく将。

吉田 「うわっマジで？うわっ、おーマジかー」

将 「いやー、サーセン！先輩、サーセン！」

吉田 「イーなあーイーなあー」

将 「だからどんだけだよ。しつけーよ」

吉田 「えっ、ぶっちゃけさ、どうだった？」

将 「いや、俺さ、胸とかマジで興味全然だったんだけどさ、もうあれだったね。  
やっぱ目の前にあるとき、ヘイヘイヘーイ！つって」

吉田 「いーなあ」

将 「あっ、ちょっと待って」  
将、スマホをいじる。

吉田 「ほらこれ」  
吉田、谷間画像を見せられる。

吉田 「おーすげっ！」

将 「すげーべ？」  
将、スマホをしまう。

吉田 「えっ、ちょっ、もう一回」

将 「だーめだよ」

吉田 「なんでー、もう一回だけ」

将 「お前ぜってー今夜のネタにする気だしょ」

吉田 「(少しニヤつきながら) しないしない」

将 「するな、絶対するな」

吉田 「いーじゃん、もう死んでんだし」

将 「うわっ、お前最低だな (笑う)」  
将のスマホに着信。

将 「あっ、ごめん。もしもし。ああ、ああ、ははっ、うん、ああ、うん、わかった。  
うん。今、吉田ん家居っからさ、うん、はいはい。はい。 (切る) ごめん、  
俺帰るわ」

吉田 「あれ、どないしはったんどすか？」

将 「今付き合ってる女がすげー面倒臭くてさ、メンヘラっつーの？本当だりーの」

吉田 「彼女のどこ行かはるんどすか？」

将 「行って別れてくるわ。もう付き合いきれねーし」

吉田 「行かはったらええ、行かはったらええわ。いやー、難儀な話やわー」  
将、立ち上がる。

将 「あっ、明日どうする？」

吉田 「悩みどころやわー」

将 「じゃ、まあ、決まったら LINE して」

吉田 「了解どすー」

将 「じゃっ」  
将、出て行く。  
吉田、頭をかき、トイレへ。  
寝ていた女起きあがる。

あゆみ「まーくん？まーくん？」

トイレの音。

あゆみ「まーくん！まーくん！」

ドアの音。

吉田戻ってくる。

吉田「あっ」

あゆみ「おはよう」

吉田「おはよう」

音楽。

テレビに文字、「君とダイナマイト」

あゆみ「どこ行ってたの？」

吉田「トイレ」

あゆみ「何してたの？」

吉田「小便」

あゆみ「あゆみちゃん起きたのに？」

吉田「いや、寝てたじゃん」

あゆみ「知らない、まーくんキライ」

吉田「ごめんなさい」

あゆみ「キライ」

吉田「いや、だってお前が起きてくると思わなかったから」

あゆみ、吉田を叩く。

あゆみ「お前じゃないでしょ、あゆみちゃんでしょ！ほら、言ってみ、あゆみちゃん」

吉田「あゆみちゃん」

あゆみ「よし」

吉田「あゆみちゃん ごめんなさい」

あゆみ、吉田をなでる。

あゆみ「イイコ。もうこんなことしちゃダメだよ？わかった？」

吉田「はい」

あゆみ、テーブルのビールを見る。

吉田「ああ、さっきまで しょうちゃん来てたんだよ」

あゆみ「知ってる」

吉田「あー、え？」

あゆみ「知ってる」

吉田「起きてたの？」

あゆみ「ううん、あゆみちゃん何でも知ってるから」

吉田「マジかー」

あゆみ「マジマジ」

吉田「さっすがー」

あゆみ、吉田を叩く。

吉田「え？」

あゆみ「今、バカにしたでしょ」

吉田「いや、してないしてない」

あゆみ「ウソだ」

吉田「いや、本当にしてないって」

あゆみ「あゆみちゃん、分かるんだからね」

吉田「ちょっと、ホント、してないって」

あゆみ「・・・じゃあ、あゆみが間違ってたの？」

吉田「えっ・・・あー、えーと」

あゆみ「間違ってたの？」

あゆみ、泣きそうになる。

吉田「うううん、間違っていないよ」

あゆみ「間違っていないの!？」

吉田「いや!間違ってる、よ？」

あゆみ「間違ってるの？」

吉田「えーと」

あゆみ「わけわかんない！」

吉田を叩く。

吉田「いっつ」

あゆみ「キライ」

あゆみ、吉田を避けるように寝る。

沈黙

吉田「あゆみちゃん？」

あゆみ「・・・」

吉田「おーい」

吉田、あゆみの体を揺する。

吉田「起きてー」

返事はない。

吉田、あゆみの横に寝転び、胸を揉む。

吉田「おっばい」

反応はない。

吉田「おっばい、握り潰すよ？」

握り潰そうとする。

吉田 「あれっ？あれ？おっばいが無い・・・」  
吉田のスマホが鳴る。(LINE)  
吉田、寝ながらスマホを取ろうとするが手が届かない。  
仕方なく起きあがり、スマホを取る。

吉田 「フフッ」  
返信。その後、またベッドに戻る。

吉田 「ちょっ、あゆみちゃん、これ見てこれ、ヤバくない？」  
反応がない。

吉田 「ねえー。・・・怒ったの？」  
反応がない。

吉田 「ねえ、なんで？なんで怒ったの？ねー。何か言ってよ」  
反応がない。

吉田 「謝るからさー。ねー。とりあえずこっち向いてよ」  
LINE の音。

吉田 「じゃあ、まーくん そっち行っちゃうよ？」  
吉田、あゆみが向いてる方に移動する。

吉田 「どうも、こんばんわ、つって、ハハハ」  
反応がない。  
吉田、寝ているあゆみにキスをする。  
LINE の電話着信音。

吉田 「あー、うるせー」  
鳴り続ける着信音。吉田は寝る。  
しばらくして、同じ着信音が被って入ってくる。  
そして、先に鳴っていた着信音が消え、後から鳴った着信音だけになる。  
その音に起きるあゆみ。  
吉田のスマホを見た後、吉田を起こす。

あゆみ 「ねえ、ねえ」

吉田 「ん」  
あゆみ、吉田のスマホを取り、見せる。

あゆみ 「うるさい」

吉田 「あー、ごめん」  
吉田、受け取り、電話に出る。

吉田 「もしもーし、あ、おはよー」  
あゆみ、トイレへ。

吉田 「ああ、ごめん、今起きたわ。うん、ごめんごめん。あ、もう行ってる？ああ、えっ、何打ってんの？ははっ、好きだねー。おー、あー、うん、分かったー。



なるはやで行くよ。楽園で良いんだよね？冗談だよ。行くよ。

うん、じゃ、また後で一」

電話を切り、伸びをして冷蔵庫へ。

冷蔵庫を開け、中を見て、

吉田 「あー、そうだ (った)」

戻って来て座り、タバコを吸う。

スマホをいじる吉田。

トイレの音。トイレの方をちらっと見る。

ドアの音。あゆみが戻ってくる。

吉田 「飲み物さ、なんか買っといてくれない？」

あゆみ 「あ、うん」

あゆみ、ベッドに座る。

あゆみ 「どっか行くの？」

吉田 「あ、うん。しょうちゃんと遊びに行ってくる」

あゆみ 「パチンコ？」

吉田 「いや、違うよ？」

あゆみ 「・・・」

吉田 「いや、パチンコじゃないから」

あゆみ 「ホントに？」

吉田 「ホントホント」

あゆみ 「じゃあ、あゆみと遊ぼ？」

吉田 「えー？いや、だって、しょうちゃん待ってっからさ」

あゆみ 「どこ行くの？」

吉田 「伊勢佐木らへん」

あゆみ 「行って何するの？」

吉田 「ほら、前一緒に行ったじゃん、サントロペの横のゲーセン。あそこ行ってくる」

あゆみ 「あゆみも行く」

吉田 「いや・・・ほら、今日はしょうちゃんと約束してるし」

あゆみ 「・・・」

吉田 「じゃあ、明日行こうよ、明日」

あゆみ 「・・・行かない」

あゆみ、ベッドに寝転ぶ。

あゆみ 「キラーイ」

吉田、タバコを消す。

あゆみ 「あゆみ置いてパチンコ行けばいいじゃん」

吉田 「いや、だからさ、パチンコじゃないから」

あゆみ、吉田を見る。

吉田 「・・・」

あゆみ「違うの？」

吉田 「うん」

あゆみ「ホントに？」

吉田 「うん」

あゆみ「スロットって言ったら怒るよ」

吉田 「・・・ハハッ」

あゆみ「もう知らない」

あゆみ起きあがり、部屋のテーブル近くに置いてあったバッグを持つ。

吉田 「？」

あゆみ「・・・」

無言で出て行こうとするあゆみ。

吉田 「えっ、どこ行くの？」

あゆみ「・・・」

吉田 「あゆみちゃん、ごめんね」

あゆみ「・・・」

あゆみ出て行く。

取り残される吉田。

吉田 「なんなんだよ！」

吉田、ベッドの布団を殴る。殴る殴る。

吉田 「マジ死ねよ！」

吉田、トイレに行く。怒りが収まらない叫び声。

吉田 「あー！あー！」

戻って来る。タバコやサイフを持ち出て行く。

しばらく後、あゆみ帰って来る。手にはコンビニで買った飲み物(ペットボトル)。

部屋に入り、見回す。

その後、冷蔵庫に飲み物を入れ、ベッドの布団をなおす。

ベッドの横に座るあゆみ。

どこか一点を見つめている。

LINE の音。LINE の音。LINE の音。

あゆみ どこか一点を見つめている。

LINE の音。

あゆみ立ち上がり、ドアへ行き、鍵をかける。

部屋に戻って来たあゆみ、ベッドの布団をグチャグチャにする。

そして冷蔵庫から先程入れた飲み物を取り出し、キッチンへ。

ペットボトルのキャップが部屋に飛んでくる。  
ペットボトルの中身を捨てる音。  
空のペットボトルを持って戻ってくるあゆみ。  
キャップを探し、フタをして冷蔵庫に入れる。  
そして、バッグから薬を取り出し飲み、ベッドへ。  
寝れるように少しだけ布団をなおし、横になる。  
もぞもぞと布団が動き、かすかに聞こえる喘ぎ。  
LINEの電話着信音。  
布団が大きく動く。声もわずかに大きくなる。  
鳴り続ける着信音。  
音楽。  
ドアから吉田、部屋に入り、そのままベッドの横に座る。  
動き続ける布団。  
吉田タバコを吸う。  
起きあがる あゆみ。  
後ろから吉田に抱きつく。  
それを払いのける。  
もう一度アプローチをする あゆみ。  
だが相手にされない。  
そして、もう三度目のアプローチをした時、吉田がキレる。  
音楽は流れたまま。

吉田 「なに？」

あゆみ 「・・・」

吉田 「ねえ」

あゆみ 「・・・」

吉田 「なに？」

あゆみ答えずに泣きそうな顔をする。

吉田 「だから何？言わなきゃわかんねーじゃん」

あゆみ 「知らない」

あゆみ、寝る。

吉田 「お前さあ」

聞く気のないあゆみを見て、深い溜息。

吉田 「・・・」

何かを言おうとするが言葉にできない吉田。

立ちあがり冷蔵庫へ。

開けて中を見て、少し強めに閉める。

吉田 「ちょっとコンビニ行ってくる」  
サイフとタバコを持つ。

吉田 「何か欲しいのある？」  
返事はない。  
吉田 溜息。  
吉田 出て行く。  
少しの沈黙。  
後、インターホンの音。  
不規則に鳴る。  
そして、ドアノブを回す音。

将 「あれ」  
将が顔を出す。

将 「まさしー」  
返事はない。

将 「おーい」  
返事はない。舌打ち。  
将、電話をかける。  
部屋の中から LINE の電話着信音。

将 「おーい」  
電話を切る。  
どうしようか迷う。その後、少し息を吐き、小声で

将 「おじゃましまーす」  
部屋までゆっくりと歩を進める。  
部屋に着くと、まず あゆみを見つける。

将 「寝てる」  
他を見回すが吉田の姿は無い。  
その後、トイレと風呂を見に行くが姿はない。  
部屋に戻って来た将。  
とりあえずテーブル横に座る。  
あゆみが気になる将。

将 「おはよーございまーす」  
反応はない。

将 「あーちゃん？あーちゃん」  
反応はない。  
その場に耐えきれなくなる。  
立ち上がり、ゆっくりと部屋を出ようとする。

その時、LINE ではない電話着信音が部屋から聞こえる。  
辺りを見回すが どこか分からない。  
とりあえず逃げるように帰ろうとする。  
急いで靴をはき、ドアを開けて出ようとしたその時、  
丁度 吉田が帰って来る。

吉田 「うおうっ」  
将 「おうおっ」 } 同時  
吉田 「えっ、なにしてんの？」  
将 「いや、何もしてないよ、鍵開いてて」  
吉田 「あ、マジで？」  
将 「いや、ホント ガチで何もしてないからね」  
吉田 「ああ、うん」  
将 「いや、ホントに」  
吉田 「おお」  
将 「いや、マジで」  
吉田 「分かったって、なんかしたみたいじゃん、それじゃあ」  
将 「ああ、だよね」  
吉田 「変なの、とりあえず入れよ、って入ってるけど」  
将 「ああ、うん」  
吉田 吉田、中に入る。  
将 「あっ、電話鳴ってっけど」  
吉田 「ああ、鳴ってるね」  
将 電話切れる。  
将 「あ」  
吉田 ドア付近に立ったままの将。  
吉田 「 ? いいよー 」  
将 将、中に入ってくる。  
吉田 吉田、いつもの位置に座る。  
将 将も座る。  
吉田 吉田、自分のスマホを見る。  
吉田 「ああ、ごめん、LINE 気づかなかったわ」  
将 「ああ、いいよ、ってか きちんと携帯しろよ」  
吉田 「ごめん ごめん」  
吉田 吉田、スマホをいじる。  
将 少しの無言。  
将 「ってかさ」

吉田 「うん」  
将 「鍵かけないと危なくね？」  
吉田 「いや、忘れちゃうんだよねー」  
将 「いや、忘れんなよ」  
吉田 「ハハハ」  
    吉田、タバコを吸う。  
    将、あゆみを見る。  
吉田 「ん、今日はどしたの？」  
将 「ああ、そうそう、忘れてた」  
吉田 「忘れんなよ」  
将 「いや、お前に言われたくないからね」  
吉田 「ハハハ」  
    少しの間。  
吉田 「んで？」  
将 「ああ、前さ、ユキちゃんの話したじゃん？」  
吉田 「ああ」  
将 「あれらしいよ、主任から聞いたんだけどさ」  
吉田 「うん」  
将 「自殺だって」  
吉田 「おー、やっぱり？だろーなとは思ってたけど」  
将 「やっぱだよねー」  
吉田 「ってか 見た目からしてマジメンヘラっぽかったし」  
将 「しかもしかも、死んだの ざーさん家らしくて」  
吉田 「マジか！うわー災難」  
将 「ざーさん仕事から帰って来たら死んでたんだって」  
吉田 「へー。え、どうやって？」  
将 「手首切ったみたいよ」  
吉田 「うわーベタだねー。ってか痛そう」  
将 「そりゃ、痛いべ」  
吉田 「だってさ・・・いやー、無理だわー。俺ぜってー無理だわ」  
    将、タバコを吸う。  
吉田 「ってか、あれだよ。メンヘラって手首切るの好きだよ」  
将 「たしかに」  
吉田 「究極のドMじゃん」  
将 「ははっ たしかに」  
吉田 「ってか、ざーさんとはまだ続いてたんだ」

将 「いやっ」  
吉田 「ん？」  
将 「なんかねー、もう終わってたぼいんだよね」  
吉田 「・・・ほう」  
将 「うん」  
吉田 「えっ、なのに ぎーさん家で死んでたの？」  
将 「らしい」  
吉田 「怖っ、うわっ怖っ」  
将 「やべーべ？」  
吉田 「いや、怖いってか無いわー」  
将 「だしょ？」  
吉田、立ち上がりトイレへ。  
吉田 「いやー無いわー」  
一人、タバコを吸う将。  
トイレから声。  
吉田 「無いわー！」  
将 「ははっ、うるせーよ！」  
静かになる。  
将、あゆみを見る。  
トイレの音。  
将、スマホをいじる。  
吉田、戻ってくる。  
吉田 「ってかさー、ぎーさんがフッタってこと？その流れで行くと」  
将 「そこまでは分かんないけど、多分、でしょー」  
吉田 「なんか意外だね」  
将 「ねっ」  
将、タバコを消す。  
将 「ってか、ぎーさんにそんなに本気だったってのがウケんだけど」  
吉田 「はははっ」  
将 「俺、マジ、あの人のどこが良いのか分かんねえわ」  
吉田 「あれだよ、きっとセックスめっちゃうめーんだよ」  
将 「うわー想像したくねー」  
将、チラっと あゆみを見る。  
吉田、タバコを消す。  
そして次のタバコに火を点ける。  
吉田 「あ、そういやさ、全然話変わるんだけどいい？」

将 「おう」  
吉田 「今日さ、シティ行って来たんだけど」  
将 「ああ、どっちの？」  
吉田 「あっち、あの左の方の」  
将 「どっちだよ (笑)」  
吉田 「小っちゃい方の」  
将 「ああ」  
吉田 「ああ、そう、長者町、長者町の方」  
将 「うん うん」  
吉田 「久々に行ってさー」  
将 「結構遠く行くねー」  
吉田 「いや、あそこやっぱ設定入ってるよ」  
将 「あ、マジで？」  
吉田 「鉄拳の6で3500枚」  
将 「おースゲーじゃん」  
吉田 「いやーマジ楽しかったー」  
将 「良いねー」  
吉田 「しかもさ、今日、なんかイベントだったみたいで、コヒガが猫耳つけて、なんかこうフワフワの着ててさ」  
将 「おー」  
吉田 「どうぞーってキャラメルポップコーンもらった」  
将 「良かったじゃん」  
吉田 「いやー、良かったよ」  
将 「シティそんなのやってんだねー」  
吉田 「うん、みたいね、初めて見たわ。しかもなんでキャラメルポップコーン (笑)」  
将 「はははっ」  
    少しの無言。  
    将、タバコを吸う。  
吉田 「ってかさー、思ったんだけどさ」  
将 「うん」  
吉田 「自殺じゃないんじゃない？」  
将 「ああ・・・」  
    間。  
将 「まあ、やっぱそう思うよね」  
吉田 「だってさ、無いでしょ、ぎーさんからは」  
将 「俺もさ、怪しいなーと思ってたんだよね」



吉田 「でしょ？」

将 「うん」

将、灰を落とす動作。

将 「ぶっちゃけさ、なんか、やりそうだもん」

吉田 「ねー」

将 「殺人犯と同じ職場とか・・・マジウケんな」

吉田 「ヤベーな」

ちよい間。

吉田 「いやー、ヤベーな」

将 「でも、あれだよ、そんな度胸あるとは思えねーけど」

吉田 「そこだよねー」

吉田、灰を落とす動作。

吉田 「でもさ、あれでしょ？あの、店の金足りなかったのって ぜってー ざーさんの仕事でしょ？」

将 「あー、そんなことあったねー」

吉田 「福田さんもそんなこと言ってた気するし」

将 「マジか、そんな時から主任、疑ってたんだ？」

吉田 「ぜってーざーさんだよ、ってすげー言ってきたもん」

将 「へえー」

吉田 「ほら、真っ先に疑われたのって福田さんじゃん？」

将 「ああ (笑)、だったねー」

吉田 「あのあたりって、すげー呑みに誘われてさ、大変だったよ」

将 「あーね。あの時さ、まだ主任とそんな仲良くなかったから、主任がやったんだと思ってたわ」

吉田 「まあね、俺もやってんのかなーって思ってた (笑)」

笑う。

吉田 「まあ、福田さん犯人だったら ただただ笑うけど」

将 「たしかに」

吉田 「んで、皆に内緒にして何割かもらうよね」

将 「おめーが一番腹黒いわ」

笑う。

将 「あっ、トイレ借りていい？」

吉田 「いーよー (ふざけた感じで)」

将 「なんだそれ」

将、トイレに行く。

吉田、タバコを消す。

吉田のスマホに LINE の電話着信音。

吉田、スマホの画面を見て少し笑い、トイレを見る。

後、電話に出る。

吉田 「私だっ。はははっ、おつかれーしょん。あー、元気っすよー、だいたい。  
ははっ、あーらしいっすねー、将ちゃんから聞きました。はい、はい、  
マジっすか？急過ぎっしょ、まあ、いいけど (笑)」

トイレの音。

吉田 「えっ、白木で良いんですか？はい、あっ、前 行きたいって言ってたところ？  
あー、了解っすー。」

将、トイレから出てくる。

吉田 「あっ、しょうちゃん、福田さんから今、電話来てさ、呑み行こうって」

将 「ああ、いーよー」

吉田 「オッケーっす。30分くらいかな？えっ、マジっすか、うわっヤバッ。

了解っす。じゃあ、10分で (笑) はーい、んじゃ、またー」

吉田、電話を切る。

吉田 「よし、行くか」

将 「ん、どこ？」

吉田 「坊主って店。分かる？」

将 「どこだっけ？」

吉田 「赤風の近く、まあ、行けば分かるよ」

将 「へえー」

吉田 「タクシー代出すからすぐ来いって」

将 「マジか (笑) どんだけだよ」

吉田 「たまにあるよね」

二人、タバコ、サイフを持つ。

将はスマホも。

将 「あっ、てか俺バイクだけど」

吉田 「あー、・・・どうする？」

将 「んじゃあ、バイクで行こうぜ。メット無いけど (笑)」

吉田 「まあ、近いから大丈夫っしょ。」

将 「タクシー代、山分けな」

吉田 「しょうちゃんだって腹黒じゃん (笑)」

二人出て行く。

沈黙。

後、起きあがる あゆみ。

あゆみ 「まーくん？まーくん？」

返事はない。

あゆみ、家の中を探す。が、誰も居ない。

部屋に戻ってきて座る。

ボーッとしている。

ふと目についた吉田のスマホを手にする。

少しスマホを見つめた後、ベッドに寝転びスマホいじる。

そこに、急いだ様子の吉田が帰ってくる。

あゆみは気付かない。

気付いた時はもう遅く、ベッド横に吉田が立っている。

目が合い、一瞬の無言。

あゆみ「あっ」

あゆみが咄嗟にスマホを隠そうと、

また、反射的に謝ろうと動いた瞬間、

吉田の蹴りが入る。

あゆみ「いっ、たい」

吉田、スマホを奪い、画面を見る。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、スマホをいじり、画面を消す。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、スマホをポケットに入れる。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、タバコを取り出す。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、火をつける。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、息を吐く。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、吸う。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、息を吐く。

あゆみ「ごめんなさい」

LINEの着信音。

吉田、スマホを取り出し、画面を見る。

そして、あゆみを見る。

後、電話に出る。

吉田 「もしもし？うん、ごめんごめん、うん。・・・ちょっとさ、ごめん、遅くなるわ。

うん、ちょっとね、うん、ごめんねー」

電話を切る吉田。

あゆみ「ごめん」

吉田「うるせー」

沈黙。

吉田のタバコを吸う音だけが聞こえる。

吉田、灰を落とす動作。

後、しゃがみ、あゆみを見る。

吉田「手、出して」

あゆみ「え」

吉田「左手で良いよ」

あゆみ「・・・」

吉田、タバコを吸う。

あゆみ「ごめんなさい」

吉田「左手出して」

あゆみ「ごめんなさい」

吉田、あゆみの左手を掴もうとする。

あゆみ、それをかわす。

吉田「は？」

あゆみ「・・・」

吉田、灰を落とす動作。

吉田「あのさー」

あゆみ「・・・」

吉田「分かんない？俺のやさしさ」

あゆみ「・・・」

吉田「左手で良いって言ってんじゃない」

あゆみ、首を横に振る。

吉田、あゆみをジッと見る。

あゆみは俯いている。

吉田、タバコを灰皿に置く。

あゆみ、それに気づき、少し顔を上げる。

吉田、あゆみの顎を持ち、キスをする。

あゆみ「んっ」

吉田、一度口を離す。

そしてもう一度、今度は先程よりも深くキスをする。

吉田、そのまま あゆみを押し倒す。

拒絶する あゆみ。

だが、なかなか吉田を離せない。

あゆみ「んーんーっ！」

吉田、離れる。

倒されたまま洗い息遣いのあゆみ。

吉田 「あゆみちゃん、セックスしよう」

あゆみ「？」

吉田 「セックスしよう」

あゆみ「なんで？」

起きあがる あゆみ。

上の服を脱ぐ吉田。

あゆみ「なんで？」

吉田 「・・・」

吉田、あゆみを押し倒す。

あゆみ「ちょっ」

吉田 「・・・」

あゆみ「ヤダッ、なんで、やめて」

聞かずにあゆみの体を貪る吉田。

あゆみ「ねえ・・・ねえ！やめて！」

吉田、あゆみの服を脱がそうとする。

あゆみ拒絶する。

あゆみ「やめてっ！・・・キライ、ホントキライ！」

吉田の動きが止まる。

泣き出すあゆみ。

吉田、あゆみから離れる。

あゆみ「キライ・・・キライ」

沈黙。

吉田、座り込み俯く。

泣いているあゆみ。

LINEの音が鳴る。

二人とも反応はない。

吉田、タバコを手に取る。

だが吸おうとしない。

動かないあゆみ。

吉田 「例えばさ」

吉田、タバコを置く。

吉田 「もしも俺が死んだら、ってかまあいつかは死ぬんだけど」  
ライターを手に取る。

吉田 「それが自殺だったらどうする？」  
反応はない。

吉田 「あー、どうするってか、泣く？」  
反応はない。

吉田 「いやさ、ユキちゃん、って前働いてた時の同僚が自殺したって  
しょうちゃん言ってるさ。ぶっちゃけそれ聞いた時、マジクソだなんて  
思ったんだよね」  
吉田、タバコを手に取り、吸う。

吉田 「マジ、クソだわ」  
泣きだす吉田。  
あゆみ起きあがる。  
そしてバッグを持って出て行く。  
吉田は泣いている。  
後、タバコを消す。  
そして、ベッドにあゆみが居るかのように喋る。

吉田 「ねえ、あゆみちゃん、やっぱセックスしよ」  
立ちあがりベッドに行く吉田。

吉田 「ねえ、あゆみちゃん」  
沈黙。  
吉田、あゆみを避けるようにベッドの壁側に寝転ぶ。

吉田 「あゆみちゃん」  
吉田、少し笑みを浮かべた後、キスをする。

吉田 「良い夢見ろよ」  
音楽。  
吉田、寝る。  
しばらく後、インターホンの音が何度か鳴る。  
その後、玄関のドアが開き、将が顔を出す。

将 「おーい、まさしー」  
吉田、寝ている。

将 「おーい」  
返事はない。  
将、靴を脱ぎ、中に入る。

将 「お邪魔しまーす」  
将、部屋に入り、吉田を見つける。

将 「寝てる」  
将、吉田を蹴る。

将 「おい、起きろー」  
起きない吉田。  
何度も足で揺する。  
だが起きない。  
将、軽く舌打ちをする。  
その後、とりあえず いつも吉田が座ってる場所に座る。

将 「汚ねーなあ」  
タバコを吸い始める将。  
LINEの電話着信音。  
将、まわりを見渡し、吉田の服からスマホを取り出す。  
そして、画面の名前を確認後、電話に出る。

将 「もしもーし。おっつー。俺、まさしー。ハハッ。うん、いやさー、  
今、まさしん家に居ただけどさ、こいつ寝てんのさー。うん、さっきかから  
スグー蹴ってただけどさ、全然起きないのさ。どんだけだよって。  
今、どこ？ああ駅来た？んじゃあさ、そのまんま上大岡の方に歩いて来て。  
したら左側にガソスタ見えてきて、んで川流れてて、橋あるから、  
橋渡ってすぐ右に曲がって2つ目のアパート。うん、大丈夫？  
まあ分かんなかったらもう一回電話してー。うん、うん、はいはい」  
電話を切り、テーブルに置く。  
そして吉田を見る。  
寝ている吉田。  
頭をかきながら

将 「なんで上だけ脱いでんだよ」  
将、タバコを吸う。

将 「あ」  
将、自分のスマホを取り出し、電話をかける。

将 「あっ、ごめんごめん、あんさー、今、どこ？うん、あーじゃあさ、その先に  
スリーエフあるから、タバコ買って来てくんない？金は来てから渡すから。  
分かる？俺の。だよねー。アメスピの9mg。うん、アメスピの9mg。  
あー、2個でうん、うん、よろしこー。はい」  
将、電話を切る。

将 「あ」  
将、立ちあがり、冷蔵庫へ。

将 「ん？」

将、空のペットボトルを取り出す。

将 「なにコレ？」

将、部屋の方に顔を出す。

将 「おーい、まさしー」

起きない。

将、空のペットボトルを持ったまま吉田の所へ。

また足で揺らす。

将 「おい、いいかげん起きろって」

反応はない。

将、舌打ち。ペットボトルを置く。

そしてタバコを消し、電話をかける。

将 「あ、もしもし？今ドコ？ああ、そっか、じゃあ、ちょっと待ってて、俺も行くわ」

電話しながら玄関へ向かう将。

将 「あれなのさー、まさし飲み物もつまみも何も準備してなくてさー。

相変わらず起きねーし。うん、うん、だから俺も行くわー」

将、出て行く。

ドアが閉まる音と同時に吉田が起きる。

大きなあくびをし、ベッドに座り、スマホを見る。

吉田 「おあっ、マジかー」

吉田、寝転ぶ。

吉田 「マジかー」

LINEの電話着信音。

すぐに電話に出る吉田。

吉田 「もしもーし、おはよー。ごめんごめん、寝てたー。あーだよねー。

えっ、今ドコ？ああ、了解、了解、俺も行くわ、うんうん。はーい。」

吉田、電話を切る。

立ちあがり、脱ぎ捨ててあった服を着る。

置いてある空のペットボトルを手取る。

吉田 「？」

吉田、ペットボトルを置く。

その後、足早にトイレへ。

しばらく後、インターホンの音。

トイレの水を流す音。

吉田、トイレから出て来て玄関へ。

ドアを開く。

そこには将。手にはコンビニ袋。



吉田 「おう」  
将 「よっ」  
吉田 「どしたの？」  
将 「どしたのじゃねーよ」  
吉田 「ハハハッ」  
吉田、部屋へ。  
将も靴を脱いで中へ。  
将 「今日、さみーわ」  
吉田 「あーマジかー」  
将 「あ、トイレ借りる」  
吉田 「いーよー」  
将、トイレへ。袋はトイレのドアの横に。  
吉田 「あれ？そういや、あーちゃんは？」  
将、トイレの中から  
将 「なんかねー今日、来れないらしいよ」  
吉田 「あっ、マジで？」  
将 「ルームメイト風邪ひいたんだって」  
吉田 「へー」  
トイレの流す音。  
将出てくる。  
吉田 「男だったりして」  
将 「かもねー」  
将、袋を持ち、部屋に入って来て、座る。  
吉田 「えっ、ルームメイトって女だよな？」  
将 「って聞いたけど」  
吉田 「だよねー」  
間。  
吉田 「へー」  
将 「？」  
吉田、スマホをいじる。  
将 「ん？」  
吉田 「え？」  
将 「どうしたの？」  
吉田 「あー、別に」  
将 「おー、そっか」  
吉田 「あれだよな」

将 「うん」

吉田 「あれだよってか、あれだよねー」

将 「？」

吉田 「ぶっちゃけさ・・・うん、だよねー」

将 「は？」

吉田 「あ、いや、やっぱなんでもない」

吉田、立ち上がり、トイレへ。

将、吉田を目で追い、トイレのドアが閉まってから軽く首を傾げる。

その後、袋から酒やつまみを出し、開ける。

そして、飲む、食べる。

インターホンの音。

将、玄関へ行き、ドアを開ける。

開けた先には あゆみ。

将 「うえーあ」

あゆみ 「おつかれさまでーす」

将 「どうぞー」

あゆみ 「はいー」

将、部屋へ。

あゆみ靴を脱ぎ中へ。

あゆみ 「おじゃましまーす」

将 「適当に座ってー」

あゆみ 「はいー」

将、テーブルの下手側に座る。

あゆみ、部屋に入り、いつも将が座っている位置に座る。

将 「遅かったねー」

あゆみ 「これでもすぐ来たんですよー」

将 「あーなの？」

あゆみ 「それがー、聞いてくださいよー」

将 「何なに？」

あゆみ 「今日、めっちゃ景品の数合わなくって一何度も数えなおしてたんですよ」

将 「うわっ、マジで？」

あゆみ 「しかも、今日、あの、部長の代わりに来てる人居てー」

将 「あー、山根くん？」

あゆみ 「でしたっけ？」

将 「俺らが勝手に呼んでるだけだけど」

あゆみ 「あの人がってホントめんど臭くないですか？」

将 「めんどいねー」  
あゆみ 「主任はもういいんだって言ってたんですけど、その人がもう一回数えろって  
しつこくってー」  
将 「マジか。だりいな」  
あゆみ 「主任もキレてましたもん」  
将 「あーいつものあの顔してた？」  
あゆみ 「してましたねー」  
将 「今日 カウンター、主任と？」  
あゆみ 「今日は さとみんとです」  
将 「うわー、伊藤かー、ぜってー伊藤じゃん、やらかしたの」  
あゆみ 「んー」  
将 「あいつホント成長しねーな」  
あゆみ 「でも、さとみん最近頑張ってますよ？」  
将 「なの？」  
あゆみ 「一回一回ちゃんとメモ見てますもん」  
将 「まあ、だからダメなんだよなー」  
将、タバコを吸う。  
あゆみ、言い返したいが何も言えない不満気な表情。  
あゆみ 「そういえば吉田さん居ないんですか？」  
将 「んートイレ行ってる」  
あゆみ 「あー」  
間。  
トイレの流す音。  
吉田、出て来る。  
吉田 「いらっしやーい」  
あゆみ 「おじゃましてまーす」  
将 「おめーなげーよ。どんだけウンコしてんだよ」  
吉田 「うるせー、ウンコじゃねーよ」  
将 「じゃあ、何だよ」  
吉田 「あれだよ、ウンコだよ」  
将 「ウンコじゃねーかよ」  
あゆみ 「ちよっ、ウンコウンコやめてー」  
吉田 「ハハハ」  
吉田、ベッドに腰かける。  
吉田 「遅かったねー」  
あゆみ 「あ」

将 「なんかー、あれらしいよ。カウンタートラブったんだって」

吉田 「おーマジか」

将 「ねっ」

あゆみ 「そうなんですよー」

吉田 「そら大変やったなあ」

将 「なんだそれ」

吉田 「えー？」

あゆみ 「興味全然無さそうじゃないっすかー」

吉田 「うん、無いね (笑)」

あゆみ 「うわーひどっ」

吉田 「ハハハ」

吉田、タバコを吸う。

将 「あっ、好きなの飲んで」

あゆみ 「あ、はーい」

あゆみ、チューハイを手にする。

吉田 「いただきまーす」

吉田、ビールを手にする。

二人、開ける。

将 「じゃ、おつかれー」

吉田 「おつかれー」

あゆみ 「おつかれ様でーす」 } 同時

三人、乾杯する。

三人、飲む。

吉田 「あっ、明日どうする？」

将 「あーそうだ、ごめん、明日無理っぽいんだよねー」

吉田 「おーマジか」

将 「ごめん ごめん」

吉田 「なんかあったの？」

将 「いや、大した用じゃないんだけどさ」

吉田 「おー」

間。

吉田 「え、なに？気になる気になる」

将 「まあ、色々あんだよ、ねっ (あゆみに)」

つまみを食べるあゆみ。

あゆみ 「えっ、あたしですか」

吉田 「えー何？チョコ一気になんだけど、ねっ (あゆみに)」

あゆみ「そうですねー」

将 「んー」

将、タバコを消す。

つまみを食べる吉田。

将 「あれなんだよね」

吉田 「あ、これうまい」

あゆみ「おいしいですよね」

将 「うん、聞けっ！」

吉田 「え、結局言うの？」

将 「じゃあ、言わねーよ」

吉田 「ごめん、冗談だって」

将 「もう言わねーし」

吉田 「しょうちゃん、ごめんって」

将 「・・・いや、あれなのさ、ホント大した話じゃないんだけどね」

吉田 「うん」

将 「俺、実は子供居んだよね」

吉田 「えっ、マジで？」

あゆみ「えっ」

同時

将、ビールを飲む。

吉田 「ガチで？」

将 「ガチで」

あゆみ「うわっ、ヤバッ」

将 「いや、でも あれだよ、会ったことねーけど」

吉田 「どゆこと？」

将 「いやー、昔付き合ってた女、妊娠させちゃってさ、しかも別れてからそれ

知らされて、いやー、バビったよね」

あゆみ「えっ、墮ろさなかったんですか？」

吉田 「だよねー」

将 「うーん、俺はね、墮ろせって言ってたんだよ、もう別れてたし。んで、金も

払うつもりでいたし。けど向こうが産むって聞かなくてさ」

吉田 「あー」

将 「もう、大変だったよ。互いの親同士でも話し合って」

吉田 「マジかー」

あゆみ「ヤバッ」

将 「で、結局、子供は産むことにして、俺は養育費とか色々は払わなくて良い代わりに

女にも子供にも会わないってことになったんだよね」

吉田 「は一」

将 「うん」

あゆみ 「え、それなら明日ってなんなんですか？」

将 「いやさ、こないだ女から連絡来てさ。なんかあれなんだよね、子供、男の子だったらしいんだけど、名前、将吾ってつけたらしくて」

吉田 「えっ、将って同じ字で」

将 「同じ字で」

吉田 「うわー」

将 「で、なんか、今、3歳らしいんだけど、一回子供に会ってくれって言われてさ」

吉田 「え、でも もう会わないって約束だったんじゃないの？」

将 「そうなんだよ。だから意味分かんなくてさ、しかも、向こうの親も頭おかしくてさ、父親なんだからとか言ってやがってさ。意味分かんねーの」

吉田 「それどうかしてんな」

将 「だしょ？」

あゆみ 「明日、会うんですか？」

将 「・・・どうなるんだろうね。分っかんね。向こうは なんか俺の実家に来るらしいけど」

あゆみ 「あー」

沈黙。

吉田 「あれだよな」

二人、吉田を見る。

吉田 「しょうちゃん 大した話じゃないって言ってたけどさ、胎した話だったね、妊娠だけに」

間。

将 「ん？」

あゆみ 「え？」

吉田 「え？」

少しの間。

後、吉田、つまみを食べ、

吉田 「これ、おいちー」

将、あゆみ、笑う。

将 「おめー、このタイミングで それはねーだろ」

あゆみ 「ヤバー」

吉田 「見ないでー」

三人して笑う。

将 「胎したは無いわー」

吉田 「え、いや、上手くない？」  
将 「上手いとか上手くないとかじゃねーし」  
あゆみ、ずっと笑ってる。  
将 「ほら、あーちゃんツボってんじゃん」  
吉田 「ごめんなさーい」  
将 「ウケるわー」  
将、トイレにい行く。手にはスマホ。  
笑ってる あゆみ。  
吉田 「そんな面白かった？」  
あゆみ 「吉田さんて面白いですよ」  
吉田 「マジで？」  
あゆみ 「はい、あたし吉田さんのそういうところ好きですよ」  
吉田 「マジでー？」  
あゆみ 「はははははっ」  
吉田 「じゃあ、俺と付き合っちゃう？」  
あゆみ 「えー？」  
吉田 「彼氏居るの？」  
あゆみ 「いやー、居ないですけど」  
吉田 「じゃあ、良いじゃん」  
吉田、あゆみに近づく。  
あゆみ 「えー」  
吉田 「分かった！じゃあ、まずはセックスから始めよ」  
あゆみ 「ヤバッ (笑)」  
吉田 「ねー良いじゃーん」  
吉田、あゆみにくつつく。  
あゆみ、逃げようとしなない。  
あゆみ 「えー」  
吉田 「嫌？」  
あゆみ 「嫌じゃないけどー」  
吉田、あゆみにキスをする。  
あゆみ、拒みはしないが、目を開けたまま不満気。  
吉田、唇を離す。  
吉田 「どう？」  
あゆみ 「奪われた」  
吉田 「奪っちゃった」  
あゆみ 「んー」

吉田 「ねえ、付き合おっ」

あゆみ 「んー」

吉田 「嫌そう・・・」

あゆみ 「嫌じゃないけど」

吉田、あゆみを押し倒す。

そして、激しくキスをする。

あゆみ 「んーんー」

吉田、あゆみの胸を揉む。

あゆみ 「んっ」

吉田、唇を離す。

吉田 「ねえ、付き合おう？」

あゆみ少し考える。

後、小さく頷く。

吉田 「マジで？ホントに良いの？」

あゆみ 「やっぱヤダ」

吉田 「えー」

あゆみ 「ふふっ しょうがないなあ」

吉田の頭を撫でる。

吉田 「あーちゃん」

吉田、あゆみの体に顔を埋める。

トイレの流す音。

吉田ガバッと起きる。

トイレから将が出てくる。

あゆみは寝たまま動かない。

将、部屋に入ってくる。

吉田 「おう」

部屋の入口付近で立ち止まる将。

吉田 「どうしたの？」

問いかけに答えない将。

しばしの沈黙の後、

将 「まさし」

吉田 「ん？」

将 「何してんの？」

吉田 「え？」

将 「何してんの？」

吉田 「・・・え？」



寝ている あゆみを見る。

吉田 「え？」

音楽。

照明変化。

吉田を見ている将。

茫然とする吉田。

あゆみ起きあがる。

吉田は反応しない。

あゆみ、やさしく吉田にキス。

それを見ている将。

あゆみ、唇を離す。

そして、両手を腰から徐々に首に這わせる。

後、吉田を押し倒し、首を絞める。

首を絞める。

絞める。

すると、吉田の手があゆみの頭を撫でる。

あゆみ、泣く。

あゆみを抱きしめる吉田。

泣く あゆみ。

見ている将。

あゆみ、起きあがり、空のペットボトルを手に取り、立ち上がる。

少し体勢を起こす吉田。

あゆみ、吉田を見たまま、微笑み、空のペットボトルの中身を頭からかぶる。

それをただただ見ている吉田と将。

中身を全てかぶったあゆみ、その場に倒れる。

震えながらも吉田は近付き、あゆみを抱き抱える。

吉田はあゆみをベッドに連れて行き、寝かせる。

そして、もう一本の空のペットボトルを手にする。

将、タバコに火をつける。音楽 C・O。

将 「まさし」

吉田、将を見る。

将 「何してんの？」

吉田 「え？」

将 「何してんの？」

吉田 「・・・え？」

将 「行かないの？ハイライト」

吉田 「あ、え、いや、行くよ？」

将 「だったらさっさと準備しろよ（笑）」

吉田 「ごめん ごめん、ポーっとしてたわ。もうちよい待って」

将 「まさし」

吉田 「ん？」

将 「手出して。左手で良いよ」

吉田 「え？」

将 「出して」

吉田 「えっ、何急に」

将 「いいから」

吉田 「いや、意味分かんねーし」

将、吸っているタバコを左手に持ち、右手で吉田の左手を掴もうとする。

吉田は逃げる。

将 「は？」

吉田 「いや、なんなの？」

将 「いや、そっちこそなんなんだよ」

吉田 「あ？」

将 「何、ビビってんの？」

将、タバコを吸う。

間。

将、あゆみに向き、触ろうとする。

吉田 「ちょっ」

将 「え？」

吉田 「なにしてんの？」

将 「起こそうかなって」

吉田 「なんで？」

将 「なんで？・・・あー」

将、タバコを消す。

そして、吉田に向き、

将 「気持ち悪いから」

LINEの音。将、スマホを見る。

あゆみ起きる。

あゆみ 「あ、しょうちゃん おはよう」

将 「おはよー」

将に抱きつくあゆみ。スマホをいじる将。

あゆみ 「なんで あゆみのこと起こしてくれなかったのー」

将 「いや、寝てたじゃん」

あゆみ 「寝てないよ。あゆみちゃん起きてた」

将 「マジか」

あゆみ 「マジマジ。ふふっ」

LINE の電話着信音。

あゆみ、ベッドに倒れる。

吉田、電話に出る。

将 「あ、もしもし？」

吉田 「もしもし」

将 「オレだよオレ、なあ、オレだよオレ、オレオレ、オレだってオレ」

吉田 「えっと」

将 「オレだよ、だからオレだって、なあオレオレオレオレオレ、だからオレだっ  
て言ってんだろーがよ！」

トイレの流す音。

あゆみ 起きあがる。

あゆみ 「まーくん、どこ行ってたの？」

吉田 「トイレ」

あゆみ 「何してたの？」

吉田 「小便」

あゆみ 「あゆみちゃん起きたのに？」

LINE の音。

将 「ガチで自殺だったみたいね」

吉田 「え」

将 「ユキちゃん」

吉田 「あーやっぱりね。だろーな って思ってたよ」

将 「嘘つけ」

インターホン。

あゆみ 「どこに行くの？」

吉田 「ちょっと遊びに」

あゆみ 「あゆみは？」

吉田 「ごめん、しょうちゃん待つてっから」

インターホン。

吉田 「ただいまー」

インターホン。

吉田 「ただいまー」

LINE とは違う電話着信音。

あゆみ「吉田さんて面白いですよ」

吉田「マジで？」

あゆみ「はい、あたし、吉田さんのそういう所、好きですよ」

吉田「マジで？」

あゆみ「あははははは」

吉田「じゃあ、俺と」

LINEの音。

将「俺、子供居るって言ったじゃん？」

吉田「ああ うん」

将「んで、俺の実家に来るって言ったじゃん？」

吉田「うん、どうだった？」

将「来なかったよ」

吉田「おー、マジで？」

将「マジで」

吉田「そっかー良かったじゃん」

将「来る途中で事故ったらしくてさ」

吉田「え」

将「ははっ、死んじった」

LINEの音。

将「ってかさ、いいの？」

吉田「？」

将「あーちゃん寝てっけど」

吉田「ああ、大丈夫大丈夫。こいつ死んでっから」

将「マジか、死んじやったか」

吉田「死んだねー、やっぱ失ってから気付くよね、ああ、あー、あー、あー、あーあーあーあーあーあーなんで死んでんだよ！！」

インターホン。

吉田「ただいまー」

インターホン。

吉田「ただいまー」

ペットボトルの中身を捨てる音。

将、トイレに駆け込み、吐く。

吉田、あゆみに近付く。

吉田「あゆみちゃん、好きだよ、ずっとずっと」

吉田、空のペットボトルを持つ。

吉田「あゆみちゃんが死んだ日さ、俺、パチンコ、すっげー出ててさ。10万以上

勝ったんだよね。しかも、一撃でだよ？すごくない？」

あゆみの反応はない。

将の吐く音も聞こえなくなる。

吉田 「あの日の朝、なんかケンカしたみたいになったじゃん？だからさ、あゆみちゃんに何か買ってあげて仲直りしようと思ってたんだよね」

将、トイレから出てくる。

将 「まさし」

吉田 「ん？」

将 「ごめん、俺 帰るわ」

吉田 「どうしたの？」

将 「ほら、葬式 行かなきゃ」

吉田 「ああ、だね、頑張ってる」

将 「・・・じゃあ、また」

吉田 「じゃーねー」

将、出て行く。

吉田、あゆみに向きなおす。

すると、あゆみが起きあがる。

あゆみ 「まーくん」

吉田 「あゆみちゃんーん」

吉田、抱きつこうとするが、あゆみは拒む。

そして、吉田の頭を叩く。

吉田 「え？」

あゆみ 「嘘ついたでしょ」

吉田 「ついてないよー」

あゆみ 「あゆみちゃん分かるんだからね」

吉田 「・・・はい」

あゆみ 「ホントは？」

吉田 「ホントは・・・デリヘル呼ぼうとしてました」

あゆみ 「キラーイ」

あゆみ、ベッドに寝転ぶ。

吉田 「ごめんなさい」

あゆみ 「キライ」

沈黙。

吉田、泣き出す。

それに気づき、あゆみ、吉田を見る。

声をあげて泣く吉田。

あゆみ「ちょっ、泣きすぎ」

あゆみ、吉田を抱きしめる。

吉田「だってさ・・・だって、セックスしたかったんだもん」

あゆみ「あゆみちゃんできていいでしょー！」

吉田「だって、たまには違う人になりたいし」

あゆみ、吉田を叩く。

あゆみ「死ねよ！」

吉田「じゃあ、なんでお前が死んでんだよ！」

あゆみ「・・・」

吉田「家帰って、お前死んでるせいでデリヘル呼べなかったんだよ！

どうせお前帰ってこないと思って予約したのに、キャンセルしたんだよ！」

あゆみ「は？」

吉田「なんで死んでんだよ。なんでそんな時に死ぬんだよ。

そんなタイミングじゃ、泣きたくたって、泣けねーだろーがよ！」

沈黙。

大きく息を吐く吉田。

あゆみ「まーくん」

吉田「ん？」

あゆみ「睡眠薬って死ねないんだね」

吉田「あ、なの？」

あゆみ「うん、だめだった」

吉田「そっか」

あゆみ「うん」

間。

吉田「あれだったよ」

あゆみ「？」

吉田「血、凄かった」

あゆみ「キレイだったでしょ」

吉田「あー、今思えば確かに」

あゆみ「でしょ？」

吉田「さっすがー」

あゆみ「ふふっ」

間。

二人、見つめ合い、そして同時に

二人「セックスしよっか」

二人、笑う。

あゆみ「ヤバッ (笑)」  
吉田 「はははっ」  
          吉田、あゆみを押し倒す。  
吉田 「あゆみちゃん」  
          キスをし、脱がそうとする。  
あゆみ「ちょっ、まっ、電気、でんきー」  
吉田 「えー、いーじゃん」  
あゆみ「ヤーダ でんきー」  
吉田 「・・・」  
あゆみ「キラァイ」  
吉田 「はーい」  
          吉田、立ち上がり、電気のスイッチへ。  
          そして、振り返り、  
吉田 「あゆみちゃん」  
あゆみ「？」  
吉田 「良い夢見ろよ」  
          吉田、電気を消す。  
          同時に音楽。  
          テレビにエンドクレジット。  
          薄暗い中、ベッドで交わる二人。

幕

脚本：古屋 仁成

(※テキストの無断転載・無断使用・無断複製はご遠慮ください。)